

2つの「見える化」

大臣官房政策課国際食料情報分析官

岩本 隼人

1 はじめに

「見える化」とは、企業や国民が行う活動の一部あるいは全体について、数字等客観的に判断できる指標を駆使してその内容を把握し、情報の共有化を図りそれを修正していくことという取組と定義されます。筆者はこれまで電子政府の構築（1分野）及び低炭素社会づくり（環境分野）という分野でこの「見える化」を経験しました。

2 統計調査業務の最適化

電子政府の構築の一環として、統計調

査業務における情報システムの見直しが候補と位置づけられました。統計分野において各府省で整備する情報システムを集約し、政府全体としてシステム投資の効率化を図り、かつ、システム運営業務の円滑化を図るというミッションと言えます。

従来は、統計を供給する側である国の職員にとって使いやすい情報システムの構築という視点を中心となっていました。が、国民にとって使いやすい情報システムという視点を中心に据えました。また、ハード面では従来の大型汎用機、メインフレームとも呼ばれるレガシーシステムの見直しが必要となりました。大型汎用機はブラックボックス化し、一度導入すれば特定のベンダーに毎年多額の費用を支払い続けることとなりがちですが、業務を標準化し小型サーバーを利用することにより、ハードとソフトの調達を分けることが可能となります。

作業としては、最適規模のシステムを有機的に連携させた分散型のネットワークを構築するため、各府省がばらばらに実施していた統計調査業務を政府全体として見直すことから始めました。このため、EA（エンタープライズ・アーキテクチャー）図表を用いた「見える化」を実施し、新システムに対する府省間の合

意を目指しました。EAは組織全体として業務・システムの最適化を図る設計手法であり、全体を①政策・業務体系 ②データ体系 ③適用処理体系 ④技術体系の4つの階層に区分し、現状と理想の姿を整理した上で、情報の共有と意志の決定を図るという手法です。

3 木造住宅の二酸化炭素排出量

地球温暖化対策においては、省二酸化炭素型生活の選択等国民一人一人の温室効果ガス削減行動の促進が不可欠となっています。国全体を低炭素化へ動かす仕組みの一つとして、できるだけ多くの商品や食品、サービスにおいて、その温室効果ガス排出量等が消費者に「見える化」されることを目指すとして、カーボン・フット・プリント制度等の普及が求められました。

木材は加工等に必要なエネルギーが低い環境に優しい素材と言われますが、これを定量的に評価して「見える化」しようという取組です。鉄やアルミニウム等に比べ木材は材料製造時の二酸化炭素放出量が少ないことから、木造住宅戸あたりの二酸化炭素排出量は、鉄骨プレハブ住宅などよりも低位となります。また、国内の森林資源を利用することは、輸送距離の短縮化による輸送エネルギーの使

用量削減の効果が期待できます。

これらの「見える化」を実行していくため、LCA（ライフ・サイクル・アセスメント）手法の考え方を導入し、二酸化炭素排出量を算出することが必要となりました。LCA評価においては、評価対象範囲をどのようにするかで大きく異なります。林地での地ごしらえ・植栽・保育・伐採から製材所での製材加工、木材を利用した住宅建設等の製品加工、そして消費（家屋としての利用等）され、最後に廃棄され一部は再利用一部は燃焼というプロセス全体において、今、二酸化炭素排出量の計算が行われています。

4 終わりに

組織や人によるその行動の転換を求めていくためには、今まで以上に客観的なデータに基づく分析とわかりやすいかたちでの伝達が不可欠となっています。ここではEAとLCA手法について紹介しましたが、各現場において、必要な情報をすべてのステークホルダーが共有し、全体としての最適化を目指す試みがいいる分野で実行されてきています。農林水産政策研究所においてもその一翼を担っていきたいと考えています。